

池田吏穂 永澤美保 菊水健史（動物応用科学科 介在動物学研究室）

研究の背景と目的

イヌはオオカミと比較して、順位に関するコルチゾール値が低く、寛容性に関するオキシトシン値が高い傾向にある。このことからイヌはオオカミより寛容性が増加しているため、協力行動もしやすくなると思われる。また、日本犬は遺伝的にオオカミに近いとされており、日本犬より洋犬の方が寛容的になっていると考えられる。本研究では、協力行動の一つである食物分配に注目した。テストステロンが攻撃性の指標であることもふくめ、**イヌにおける協力行動としての食物分配の有無、また日本犬と洋犬の食物分配の違い**について調べる。



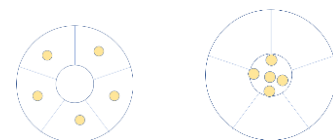
研究・調査方法

【対象個体】同居犬 2頭

【方法】①分けられる条件と分けられない条件の2つの条件で餌を提示

②餌を食べなかった個体に関して行動と視線を観察した。

③洋犬と日本犬について、食物分配の違いがあるかを観察した。



分けられる条件 分けられない条件

結果と考察

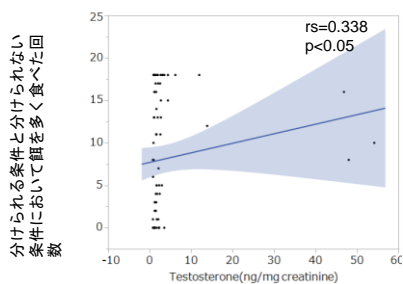


図1

・餌を食べた回数とテストステロンは有意に相関していた。（図1）

→攻撃性の高い個体が餌を食べたと考えられることから、この場面における食物分配は**協力行動ではない**と言える。

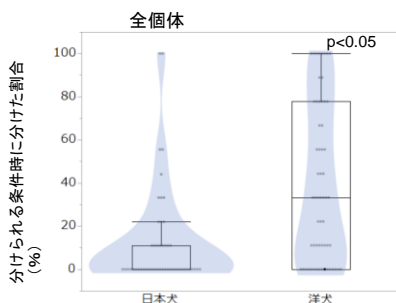


図2

・分けられる条件時に分けた割合は日本犬よりも洋犬の方が高かった。（図2）

→**日本犬より洋犬の方が寛容である**と考えられる。

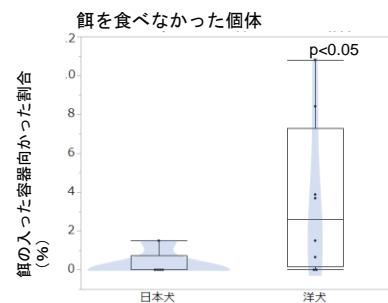


図3

・餌の入った容器に向かった割合が洋犬より日本犬の方が有意に低かった。（図3）

→**日本犬は洋犬より餌に興味がない**と考えられる。

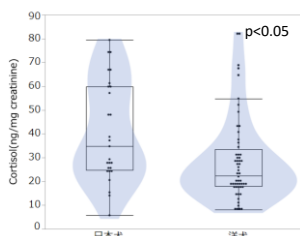


図4

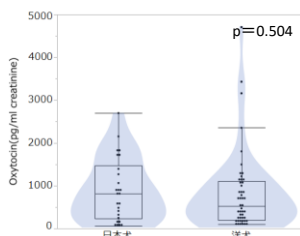


図5

・日本犬の方が洋犬よりコルチゾール値は有意に高かったが、オキシトシンに有意差はなかった。（図4, 5）

→**内分泌状態から何かを結論づけることは難しい**。

これから

今回の研究では協力行動は見られず、**食に対する執着**があらわになった。

イヌの協力行動を調べるためにはさらなる研究が必要である。

また、日本犬と洋犬の食物分配の違いについても追求する必要がある。